

駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第13回 グアテマラ

バイロン・レネ・エスコベド・メネンデス
駐日グアテマラ大使

グアテマラと日本は古い文化を継承する兄弟国
—日・中米ビジネス・フォーラムでは具体的成果を—



グアテマラ共和国のエスコベド・メネンデス駐日大使は近く離任する予定であるが、このほどラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、6年余りにわたる日本駐在の印象、日本・グアテマラ関係、明年3月に予定されている「日・中米ビジネス・フォーラム」、グアテマラの政策課題、安倍総理の中南米訪問などについて見解を表明した。

エスコベド・メネンデス大使は外務省多国間国際経済関係局多国間外交政策部長、最高裁判所国際部長などを務めた後、2008年5月より駐日大使。

大使はインタビューにおいて、日本とグアテマラは共に千年以上の古い文化を有する兄弟国であること、日本のこれまでの経済・技術協力に感謝していること、明年3月の「日・中米ビジネス・フォーラム」では具体的成果を出したいこと、両国間交流をさらに深める必要があること、安倍総理の中南米歴訪は画期的であると同時に、中南米地域に対しいくつかの明確なメッセージを伝えたこと、等の見解を表明した。

インタビューの一問一答は次のとおり。

—大使は日本に着任されて既に6年余りになりますが、日本についてどのような印象をお持ちですか？これまでの日本滞在で最も印象深い思い出は？

大使 私の日本との付き合いは約30年前にJICAの青年研修で訪日したときに始まり、以来日本の大ファンです。1990年の今上天皇の即位の礼の際もグアテマラ政府代表団の一員として参列しました。私の父は国会議員で日本グアテマラ友好議員連盟の会長を務めたことがあり、その頃の日本側会長は小淵敬三首相でした。日本に着任して早や6年半になりますが、天皇陛下に信任状を奉呈したとき、陛下にも申し上げましたが、日本とグアテマラは共に千年以上の古い文化を有する友人、というより兄弟といっても良いと思っています。中南米への日本人移民の草分けはグアテマラです。1893年に27人の日本人がハワイからの転航移民としてコーヒー栽培のためグアテマラに渡りました。日本とグアテマラには種々の文化的類似点がありますが、他方日本人のメンタリティーはラテンアメリカのそれとはかなり異なると思います。それは日本が歴史的に中国、蒙古、朝鮮半島、ロシア等の隣国から自己防衛するため、自らのアイデンティティを強化し

たことによるものではないかと推測しています。日本人の文化的アイデンティティとともに、日本人が自然を大事にすることも実に印象的で、私には日本は秩序正しい社会主義国のように見えます。ただしお金持ちですが。日本には「里山」という概念があり、自然との共生を大切にされますが、その点ではマヤ文化と相通ずるところがあると思います。私生活面では皇居の周りを歩くのが大好きです。しかし、いよいよ今月末には日本を離れることになりました。

日本でもう一つ印象的なことは、日本人としてのアイデンティティを維持しながらも皆が完全に一様ではなく、地域差があるということです。私は日本中を旅しましたが特に札幌と沖縄が好きです。札幌は8回訪れました。グアテマラと日本の文化的絆は非常に強いと言えるでしょう。日本人コーヒー移民に先立って屋須弘平という明治時代の写真家がグアテマラで写真店を開業していました。さらに、グアテマラの作家エンリケ・ゴメス・カリージョが日本を訪れ『誇り高く優雅な国、日本』を書いてから一昨年でちょうど100周年を迎えました。私もできればゴメス・カリージョが見た日本から100年後の日本について書いてみたいと

考えています。

—グアテマラといえば、文学賞のミゲル・アンヘル・アストリアスと平和賞のリゴベルタ・メンチューという二人のノーベル賞受賞者を輩出した国であり、またマヤ文化を継承する文化的、歴史的に豊かな国として知られています。日本とグアテマラの二国間関係についてどう見ておられますか。

大使 日本はこれまでグアテマラの特に人間開発のために惜しみない協力を続けてこられました。イデオロギーとは無関係の協力であり、グアテマラ国民、中でも特に先住民がそれを高く評価し、感謝しています。私は先住民の市長を何人か知っていますが、彼らは私が駐日大使に任命されたときにはあたかも大統領になったかのような騒ぎようでした。ミゲル・アンヘル・アストリアスの作品はほとんど日本語に訳され、日本の読者にも親しまれているようです。同時に、日本の「古事記」にも例えられるマヤ神話の「ポボル・ヴフ」も日本で読まれています。リゴベルタ・メンチューは未だ来日していませんが、グアテマラの先住民女性であるロサリナ・トゥユク女史が一昨年日本の（公財）庭野平和財団から平和賞を受賞し、来日しました。彼女は内戦被害に対する補償要求、女性の政治参加、先住民族の権利擁護などの課題に取り組んできました。彼女はその前にも一度訪日し、アイヌに関心を示して北海道を訪れていますが、その直後の2008年には日本の国会においてアイヌ民族を「先住民族」とすることを求める決議案が可決されました。マヤとアイヌの関係も考慮して、グアテマラ大使館は現在札幌にも名誉領事を置いています。グアテマラと日本の関係は発展しつつあり、日本はグアテマラにとっても中南米全体にとっても極めて重要な国です。この10月1日から秋篠宮殿下・妃殿下がグアテマラをご訪問されます。

—明年の3月には日本と中米との外交関係樹立80周年を記念してグアテマラ市において「日・中米ビジネス・フォーラム」が開催されますが、具体的にどういうことが企画されていますか。

大使 明年3月5、6日にグアテマラ市での開催が予定されていますが、当面の問題は資金調達です。開催国のグアテマラのみならず全参加国の平等な負担が望ましいところですが、それも容易ではないため、現在米州開発銀行（IDB）に協力の可能性を打診中です。日本はIDB通常資本への出資に加え、日本特別基金

や信託基金への拠出も行っておられるので、なんらかの形でそれらの資金から支援を得られないか、先般モレノ総裁が訪日された際に検討をお願いしました。

グアテマラとしては将来的には日本・SICA（中米統合機構）間の経済連携協定（EPA）締結を期待しています。グアテマラはすでに「太平洋同盟」のオブザーバー国です。次回の「日・中米ビジネス・フォーラム」には、日本から大勢の企業代表に参加して頂きたい。そしてこの機会を単なる政治的宣言の場やセミナーに終わらせるのではなく、具体的な投資に結びつく交渉の場にさせていただきたいと考えています。あまり時間はありません。中国や韓国が極めて積極的に進出しつつありますが、我々はより真面目で、質の高い日本との関係強化を望んでいます。

—グアテマラは日本に対しコーヒー、胡麻等を輸出していますが、将来的にどのような日本との貿易関係を期待されますか？

大使 日本はグアテマラにとって世界で8番目の貿易パートナーで、コーヒー、胡麻、砂糖等を輸出していますが、一般に中南米は世界の食糧の供給地として今後益々重要性を増すことと思います。グアテマラからはエビやティラピアも対日輸出の可能性があります。問題は具体的な対日輸出に結びつけるのに時間がかかり過ぎることです。検疫その他慎重な手続きも必要ですが、もう少し迅速に進められればと思います。グアテマラの輸出可能品目と日本の需要品目をリストアップするのも良いかも知れません。

—2009年以降グアテマラに対する外国の直接投資が増加しているようですが、日本企業がグアテマラに進出すれば成功するだろうと思われる業種にどんなものがありますか。

大使 マヤ人は昔から勤勉で手先が器用なので、繊維製品や木材関連業種には適しており、現に韓国の繊維関連企業はマキラドーラの核としてグアテマラで成功しています。日本の場合はもう少し技術力を要する業種が望ましいでしょう。いずれにしてもグアテマラの人口は15百万人で、隣のエル・サルバドルと合わせると中米経済の60～70%を占め、市場としても決して小さくないと思います。グアテマラは既に17カ国と投資協定を結んでいます。日本とも締結できればと考えています。

一両国間関係を一層促進、発展させるためには何が必要だとお考えですか。

大使 日本とグアテマラが互いにもっと知り合うことが何よりも大事でしょう。

これまで文化面ではかなりその努力がなされてきました。またグアテマラは国連において、特に最近では北朝鮮やその他の問題で日本の立場を強力に支持してきました。今後は政府、民間企業、学界等のそれぞれのレベルにおいてさらなる交流を深める必要があると思います。駐日グアテマラ大使館では最近大学間交流を進めるため京都外国語大学の横山卓哉広報室長に名誉領事に就任していただきました。

一日本のグアテマラに対する二国間援助については今後どのようなことが期待されますか？

大使 技術協力、とりわけ零細企業に関する日本の知識と経験を学びたいと思います。エビの養殖は日本から学び、成功しています。日本は保健衛生、教育、インフラを重視されており、我々もそれを評価していますが、今後は水資源の確保や地熱発電に対する一層の協力も期待しています。

一グアテマラの最も重要な政策課題は経済格差と教育・保健等の社会問題にいかに対処するかにあると思われませんが、いかがでしょうか。

大使 先住民をいかに国家開発に組み込むかが最重要課題の一つです。開発から疎外されている貧困層である先住民に教育と保健衛生を提供すること、しかしそのためには政府の徴税能力の強化、透明性の確保、腐敗の撲滅を併せて推進する必要があります。そしてその土台として制度の確立と安定性(institucionalidad)が前提条件となるため課題は山積していると言えるでしょう。

一グアテマラのもう一つの課題は治安の維持かと思いますが、いかがでしょうか。

大使 グアテマラの治安の元凶は麻薬問題にあり、これはメキシコからコロンビアまでの全地域が係わっています。グアテマラでは麻薬の生産も消費もなく、中継地として利用されています。メキシコ、エル・サルバドル、ホンジュラス、ベリーズの4カ国と国境を接し、太平洋および大西洋にも面しているという地理的条件にも拠るのでしょう。麻薬はこの地域が一体となって取り組むべき問題です。日本はこの分野でもリーダー

その他の技術的協力が可能だと思います。また治安問題の根本的解決は貧困撲滅にあり、グアテマラとしては前述した国内の貧困と社会問題に取り組むということでしょう。現ペレス・モリーナ大統領は、治安と貧困対策に全力投球しており、本年も3.7%の経済成長率が見込まれています。

一グアテマラは中米統合の促進を目指していますが、中米統合の現状と今後の見通しにつきどう見られますか。

大使 中米統合のプロセスは一時期停滞しましたが、いずれの国も一国単位では発展し得ないことに気づき、現在は域内のコミュニケーションも良くなり、統合促進の方向で進んでいます。中米では一国が停滞すれば他の国にも波及します。特に社会問題に配慮すべきであると考えています。

一グアテマラにおける中国のプレゼンスが増大しているようですが、現状と将来性についてどう見られますか。

大使 中国は中南米のすべての国が加盟しているラテンアメリカ・カリブ諸国共同体(CELAC)を通して、また各国個別に猛烈な勢いで中南米に接近しています。我々は中国一国の市場に依存し過ぎるのは危険であると認識し、日本や韓国、インド等とのバランスに配慮するよう、また中国の信頼性や製品の品質について注意するようにと本国に進言しています。

一安倍総理の最近の中南米歴訪についてどう思われますか。

大使 日本の総理の実に久しぶりの中南米訪問であり、安倍総理のリーダーシップに敬意を表します。また多数の経済界代表が同行されたことは中南米に対する明確なシグナルであったと思います。ただし中南米を単なる一次産品の供給地としてではなく日本のパートナーとして見ていただきたいと思います。そして中南米諸国と東南アジア諸国の橋渡し役になってほしいと願っています。また日本の総理がカリブ共同体(CARICOM)14カ国の首脳と会われたことも一つの重要なメッセージであったと思います。

一『ラテンアメリカ時報』の読者に対してなにかメッセージはありますか。

大使 先ずはラテンアメリカ協会のこれまでのご努力

に謝意を表したいと思います。先日ラテンアメリカ・カリブ地域（GRULAC）の駐日大使の会合でも貴協会のことが話題になり、我々が日本の企業や学界とコンタクトする際、日本のカウンターパートを紹介する等の橋渡し役を協会にお願いできると有り難いとのことでした。今後とも中南米と日本の関係増進のため貴協会の益々のご活躍をお祈りします。

（インタビュアー ラテンアメリカ協会副会長 伊藤 昌輝）

ラテンアメリカ参考図書案内



『メソアメリカを知るための58章』

井上 幸孝編著 明石書店 2014年5月 362頁 2,000円+税

「メソアメリカ」とは、メキシコ中部からグアテマラ、ベリーズ、エルサルバドルにホンジュラス西部、ニカラグア太平洋岸、コスタリカ北西部をも含む一帯を指す。古代（先スペイン期）から大河がないにもかかわらず多様な自然環境の下で農耕を基盤とし、車輪を使わず、基本的には石器だけで巨大な建造物を含む一大都市文明群を开花させ、スペイン征服後に植民地支配を受けながら文化の変容と新たな文化を生成しつつ、近代になって諸国家を形成してきた。本書はメソアメリカの地理的範囲、時代区分、文化と言語の多様性を明らかにした後、古代の歴史、文明の実像、思想と宗教、文化と社会を、スペイン人の征服によるアステカ王国、マヤ都市国家の終焉、植民地支配の中でのキリスト教化、社会と文化の変容を概述している。

しかしながら、メソアメリカ史入門で終わらせず、植民地時代を経て独立後メキシコおよび中米諸国に分かれての国家形成の中で、先住民が多い地域でありながら権力に踏みにじられ、翻弄されつつしたたかに生き、現在も生き続けている独自の文化を持った人々としても紹介している。現代のメソアメリカ社会の信仰、祭礼、農耕と儀礼、村落自治制度、都市と先住民村落、織りと装い、遺跡利用と観光開発などいまの姿を概観し、最後にメキシコにおける「先住民」イメージの誤解や思い込みにも言及している。

メソアメリカ文明の盛衰を時間という縦軸と内部の共通性、多様性という横軸から、14人の考古学、文化人類学、歴史、地域研究者が分担して総合的に解説している。

〔桜井 敏浩〕